

論文新報

都立新宿高校
文化委員会発行

46. 3. 10

印刷所 青文社

☎ 361-4906

生活の軸と 重圧の回路

三年F組 松永 雄司

朝起こされて学校へ行き授業を受けてダベってクラブをやって満員電車につめこまれて帰り、テレビを見ながら食事をして、恥をかかぬように予習復習をしてフトンに入る。ああこれで今日も一日終わった！

僕らの生活は高校生としての軸を中心の一つの必然の回路として動いている。意志は必然性のスキマにチラチラと反抗的に出没する。ひどい人は必然性に従うことを以て「意志」と云う。生活の軸は必然性の下にあり、内発的なものは軸とはずれていない。内発的な意志によらず「せねばならない」勉強や試験を軸とする高校生の必然性を「陽」とすれば内発性は「陰」で、それはほとんど逃避的、反抗的なものだ。僕は水が高いところから低いところへ流れるが如く「陽」より「陰」へ向かう。「陽」体系の巨大な白々しさは僕らは本能的にイメージしている。にもかかわらず生活の基軸はこの巨大な

白々しい体系から一つの必然として与えられたものだ。その関係が実に耐えられない。

僕は去年の夏アルバイトで、K建設本社のソウジを二十日間ばかりやった。実に近代的合理性に貫かれた建築だ。所謂「快適な職場」というやつだ。仕事をすればするほどその合理性がいやになった。若干建物の説明をしよう。超近代的な玄関を入ると三階から十三階まで事務所とその上が本社の中枢である。事務所は机が一方向きにきれいなならんでいて四十六個で一列でその中の一つがすみで横向きになつて監視がきく。後ろにいくほどエレイ人のりっぱな机でちばん後ろが部長や課長だ。二階ごとには一つお茶の自動セットがあり、地下には食堂がある。何階だか忘れたが図書室があった。仕事の本と会社の宣伝の本と反共政治の宣伝の本とブルジョア経済の本だけで、普通の図書館とはちがったムードである。さらに社員一人一人に定期的にパンフレット等が配られる。資本家の側からの政治経済分析が主で、運命共同体としてのイデオロギー注入のものらしい。

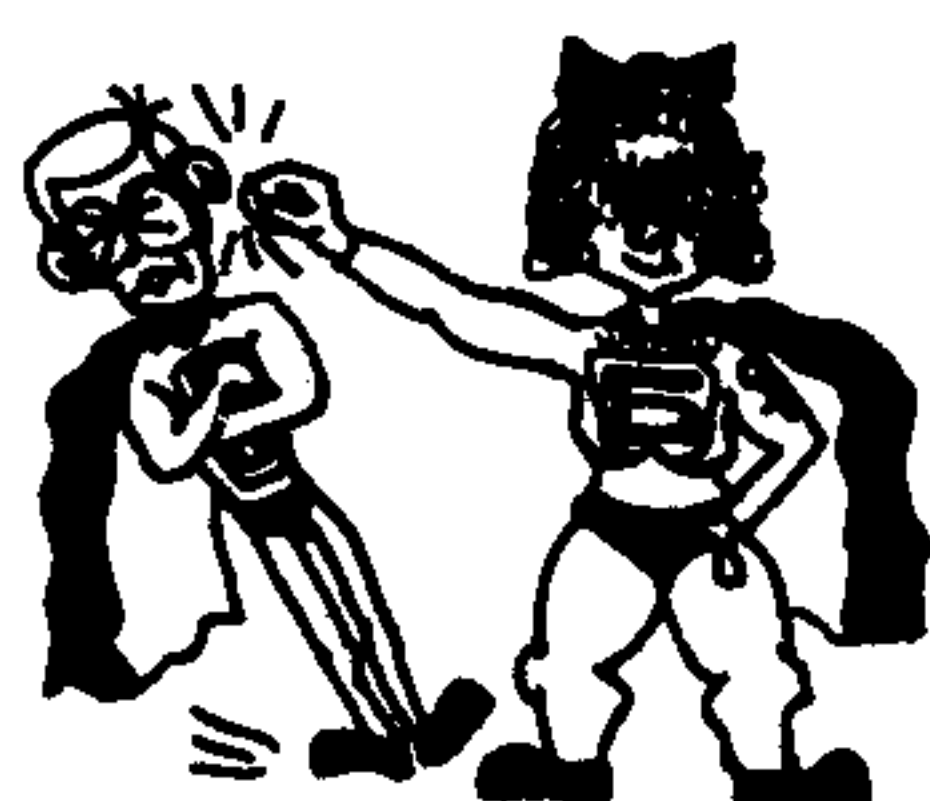
歩も外へ出る必要なく整っている。ヤボったさは全くなく、目的へ集中された空間としては実に洗練されたものである。しかも内と外の両面からの教育は恒常的で内に働く人間も個々を与えられた軸にそって働きやすくできている。五時になるとほとんど人はいなくなる。ただ、一切の空間が会社のためにできていて、無目的な空間がほとんどないのだ。トップ産業の職場とはこんなものであろうか。人間の内発的な行為の空間ではなく、外的合目的性を徹底して追求するための空間であり、その目的に合わせて教育の施された人間たちが「ここではこうすべき」という疑似的発性に基いて働いている。

外的合目的性というものは働いていく人間にとって労働が内発的ではなく必然的だからである。彼にとつて仕事は、食うためと家族を養うためと若干の楽しみのための賃金と引き換えである。仕事の質にかかわりなく労働力の商品化は人間をクールのにしていく。彼にとって労働は最終的には賃金とのかかわりのみである。だから仕事そのものの内発的な目的は関係ない。目的は外的なもの、資本家が一手に握る。労働力の商品化というすぐれた近代的关系によって多数の人々は内発的な目的に自己をひきつけて労働することを最終的にやめて賃金労働者として外的合目的性の下に身を任すようになってしまった。そしてさらに現代では肥大化した総資本のメカニズムの必然性は、全ての人間にとつても外的になろうとしているようだ。公害などはそのいい例である。人間の創造物が人間におそいかかり、人間を一面化し、さらにその存在をも侵し出したことは近代の成熟の一指標であらうか。人間が動物から自己を決定的に分つところは労働することにおいてである。労働とは自然の對象化―変革であるが、同時に人間自らの對象化である。内発性が労働からぬけたとき労働から人間の對象化のみとなり、人間を道具と同じレベルにしてしまう。賃労働が資本の要請に基いているというところが現在のところあり方だ。いくら給料が上がってもその関係―労働は外的合目的性の下のものなのである。労働からの人間の對象化は、用途別人間として分業関係にしばりつけられていることが現在のあり方である。さらに分業の高度化は種類別人間の生産を要求する。このことが教育秩序、総体を規定する軸となり、評価の問題も本質はここにある。こうして個人は分業関係の下で一面化してゆく。誤解がないように云うが分業と協働とは別である。公害は若干ちがう。生半可な科学的知識を

生産に用い、資本制生産関係の「利潤追求」のフル回転で、まだよくわかっていないなかつた部分での作用が地球の生命の連鎖をも変える程に至ってしまった。人間の創造物が人間に逆襲する、という意味では、人間の一面化や、恐慌、帝国主義戦争等資本のメカニズムによるものと同じである。

恐慌や戦争を直接には知らない僕がやはり一番おもしろくないと思うのは、外的合目的性に基く、人間の一面化、空間の一面化などが排除されてゆくことである。どのあたりから外的合目的性が生活過程の基軸に居座ったのか。断定は出来ない。内発性に基く時間空間はないのか。残念ながら今あるとしてもカッコつきのものでしかない。つまりその内発性は逃避か反抗であり「陰」の部分だ。総じて僕らの生活は二元的なのだ。高校生―学生のうちは分業関係への前段階であるから「学問」なんという幻想を抱ける、末だ楽な身分である。親たちの生活のピタリ二元的なこと、黙ってれば僕らもそうなる。○社○部○科○の存在の一面化、生活の二元化を予想することが未来の設計か。人間には実に白々しい、この巨大な閉じた回路を断ち切って止揚することができるだろうか。その可能根拠があるなら、それは人間にと

って重圧となつてゐるこの体系―回路が人間の手によるものであるということだろう。僕はこの二元化した生活過程から逃げたいし、うらみ重なるこの閉じた回路に腹が立つ。この重圧的回路の私的所所有者は総資本―階級としての資本家であり、この回路の防衛者であると共に頂点であるのは他でもないブルジョア国家権力である。回路を断つことは権力奪取、全人民所有、階級の止揚から始めるべきだろう。重圧的回路の産出が人間の手によるものなら、その解体も人間の手によつて可能だと思ふのだ。それへ至る道程を自分に引きつけてというより、現実の時間―空間が耐えがたいものだから僕は、その道程―叛逆を生きたい。バラ色の仮面を被り合理主義で武装した醜悪なる近代の閉じた回路が生理的な腐臭を放つて、今僕らの前に横たわっている。



新宿高校の危機

一年A組 齊藤 成

私達の生活、これは昔の東大合格者が日本に有数であった過去の栄光に現在の体たらくを隠しそれを自認して生きてゐるようだ。新宿高校というものは一昔前の頃は、都立高校でも日比谷をしのぎトップに位置したこともあり、生徒会活動もすばらしいものだったらしい。そして、その原動力となつてゐたものは、教師のエネルギーとなつた。そして、教師のエネルギーによるものであったことは否定できない。しかし今の新宿高校に昔の勤勉さの一かけらでもあるだろうか。

たしかに勤勉でスポーツに地道に打ちこみ、学生の本分を守つて通学している生徒もあるだろうが、大半の生徒は、勉強も試験の十日位前からやり始め、受験勉強も三年生から始める者が多い。そして予習などは、うるさい授業と英語、数学ぐらいであらう。また生活態度というものも実に悪い。一語につきる。遅刻欠席はし放題、昼休みは外へ昼食。五・六時限もつまらない授業だとポイントとボンズ、帰りに映画を見て帰るかパチンコ、喫茶店へ直行という実に生活態度にもあったものではない生活態度である。でも全生徒の心の奥底にあるものは、ただ一昔前の東大番付の上位にランキングされていた

という先輩諸氏の遺産をたよりに世間体は一応斜陽ながらも有名校というレッテルをはらせている。私にこの学校を選んだのは中学校の時、高校への通行証としての内申書で、担任から「おまえは21群を受けろ。」とか親から「また自分から21群ぐらいならなんとかなるんじゃないか」と思い、内申書かせへの進学を願つてこの新宿高校に入学してきた。これはたとえ否定しても絶対に心の底にはびこつてゐるものだ。さて、この体たらくの原因は、もちろん自分達自身の心の弱さと権力への抵抗の現われでもある。生活態度に規律をもてないからである。人間というものは、所詮弱い怠惰な動物である。ある制限(試験)を設けられるとそれは皆、承知のことだと思ふ。その時は皆、半強制的にも授業で予習体制が確立されたり、定期的な小テストなどが行なわれるようになり、校外への抜け出しが許されなくなつたりすれば、おのずとその強要に従属し、規律は大きな支配力として我々にのしかかり、結果としては、まとまりのある高校になると思ふ。へそれは決して良い方法ではなく自主性を無視してゐるが。最近、抜け出している横断歩道で校長先生と出合つたと

ところ、生徒側は「さようなら。」
とうつぶさに言う。校長先生は、
いつもながらのオリタスマイルで、
「やあ、さようなら。」とその早
帰りに、登校していかれた。また、
他の先生方も昼休みの外出を黙認
するかのやうに、外出してゆく者
の後姿をながめていらつしやる、
人間、注意されることは必要であ
る。そしてよく言われることだが
「人間、注意されなくなったらお
しまいだ。」と言われるが学校に
おいて注意することのできる者は
先生を除いて他に誰がいるのであ
ろうか。先生商売も近頃はすいぶ
ん楽になつてきたのではないだろ
うか。そういう中で、昨年服装の
標準服化がなされた。職員会議で
は、標準服という事実上の自由化
を認めた。自由化はもちろん生徒
の自主性を重んずるために必要な
ことである。が、抑圧されていて
一度でも学校に自由服で通学した
いという中学からの願望を満たさ
れると、これは始めからある自由
より勝得た自由の方が価値は大で
ある。よって、自由の理で満たさ
れなかつたこの自由服への憧れと
日頃の体たらくが相まって、さら
に決定的条件の「繁華街新宿、歩
いて2分。」この地の利を得てい
る3点によつて、恐れられていた
パチンコ屋通い、映画館への立ち
寄りというやうな形が自由服によ
る報酬として見られ始めている。

「学生服一着で態度が守られるの
なら一万円も安し」という感じも
ある。何しろ高校としての立地条
件の悪さは全国でも上位であるの
だから。今月は新入生の入試があ
り、大きな夢をもった彼らは四月
に入学してくる。「朱にまじわれ
ば、赤くなる」また、私達のように
なるのだらう。少しは気をつけ
てやろう。東大番付の上位に戻る
のがよいのではない。大正十一年
創立のかつての有名校「新宿高校
も、この辺で過去の栄光を追い求
めるのではなく、新しい新宿高校
として、受験校でないのならない
らしく規律をもった生徒が集まっ
た新宿高校を作つていかなうては
ヤクザ高校にも劣つて見える。
自意識の向上、生活態度の一新が
是非是非必要であり、その手段は
あくまでも我々の自主性より得な
ければなるまい。この辺が現在の
新宿高校の問題である。生徒会の
無力、生徒の消極性、ホームルー
ムの存在の意義の曖昧さなどの原
因があるやうに思える。我々一人
一人しっかりと自覚してほんとう
に態度だけでも改めなければ、若
くして十五、六の青年が早くも精
神の死を見出し出すという可能性が
ある。我々自身、精神的破壊がな
されてしまふと、もうどうあが
いても立ち直ることができなくな
てしまふ。その時こそ新宿高校は
死を見る。だから我々の手で生き
た新宿高校を取り戻さねばなるま

自分の知らない

自分

二年H組 中原 保裕

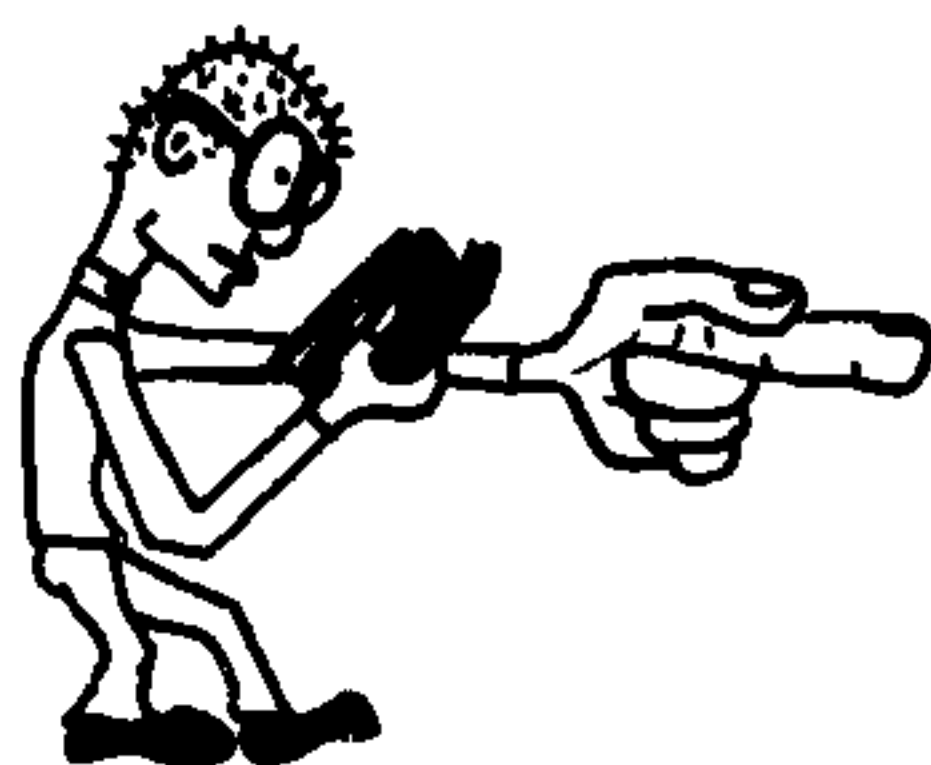
「おれのことば、おれが一番よ
く知っている。」ということばを
よく耳にするが、他人の行動や、
考え方については、よく判断した
り批判したりする人でも、割合と
自分自身については、そう簡単に
は、分析したりすることは、でき
ない人が少なくはないと思う。そ
れは、だれでも、自分自身が可愛
いし、多少のうぬぼれがあるから
だと思ふ。それによつて、自分自
身を過大評価しているのではない
か。そして、そのことに気がつか
なかつたために誤つた判断をまね
き、不幸なことにつながつたこと
が多いのではないかと思う。うぬ
ぼれに限らず、人間は、自分とい
うものが、どんな人間であるかと
いうことを、自分自身でイメージ
をもつていて、それが、自分自身
の全部だと思つていてのではない
か。確かに、自分自身については
その人が一番よくわかつていて、
いうことは、事実だと思ふが全部
知つていて、事実だと思ふが全部
ではないかと思ふ。簡単な例では、
他人から言われて初めて自分の癖
を知つたということはなかつたで
あろうか。自分がまだ経験したこ
とのないことにぶつかつてみて、

自分にこんな能力があつたのかと
知つたということはなかつたであ
らうか。

このやうに考えてみると、自分に
一番近い「自己」についてさえも、
私達は、まだ知らぬことが、多く
あるやうです。しかし、私は「一
番近い自己さえも」と書いたが、
考え方によつては、自分に近すぎ
るゆえに、捕えにくいのではない
かともいえると思う。それは、自
分によつて自分自身を、ごまかす
ことができすぎるからだ。一番わ
かりやすい例では、Aという欲求
不満の人物がいたとする。
彼は、現実に得られない欲求の満
足を空想の中を通じて味わうた
め、映画を見たり、小説を読みふ
けたりして、空想の世界に自分自
身を生活させて、その中だけに生
きがいを見いだしていくやうにな
る。このやうに、問題の本質は解
決されたわけでもないのに、彼は、
これでいいと妥協してしまふわけ
だ。いや、解決してしまふと錯
覚してしまふのかも知れない。こ
んな所から、私は、心理学に興味
をいだいたのである。別に心理学
のすすめをのべているのではなく
自分の目を外ばかりに向けるので
はなく、内に向けてみたらどう
かと思つたのです。
不満を外ばかりに向けて、いか
にも自分は悪くなかつたと、言っ
ている人を見かけるが、もう一度
考えてみれば、自己をよく知らな

かったために、自分を過大評価していたために本来の自己とイメージの自己との差の開きが、大きかったためではないだろうか。大人の人から、私達の年頃は、言動不一致といわれるのも、ここに原因があるのではないかと思う。たまには、謙虚になつて、自分自身を正しくみいだそうと努力するのでも、大切ではないか。

そして、自分を正しく知ってから社会に自分をぶつけても、おもしろいではないか。



作文 法について

二年B組 鈴木 義里

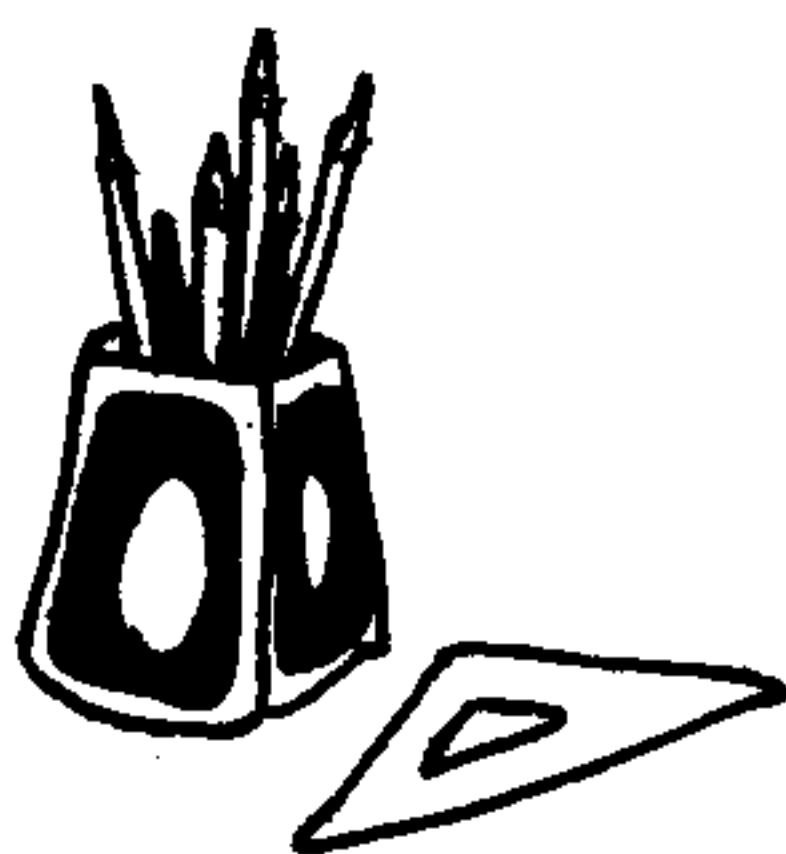
私たちは現在、日本という資本主義社会といわれている所に生活しているのである。その事は何を意味するのかわかると、資本主義社会の論理に従って生活しているという事はつまり、私たちが自分自身の事を思わないにかかわらず絶

対に、此の資本主義社会のルールに従わなくてはならないという事を意味している。どんなに頭の中を否定してみても、ところで仕方がないのである。現在の国家は資本主義政府を打倒した後には資本主義のルールに従わずに生活することは出来ないのだ。もちろん一時的には、資本主義のルールを破る事はあつたであらうが、それは一時的な事であり、長期的・持続的に資本主義のルールを打ち破つた新しいルールといったものは、日本では、存在した事がない。以上のような、まったく基本的な事を理解しない人はまずいと思ふ。しかし、なぜ資本主義のルールに従わなくてはならないのだろうか。そもそも資本主義のルールとはいったい何なのだろうか。いや、その前に、いったい資本主義とは何なのだろうか。此の事から説明して行かなくてはならない。資本主義というものを考える場合、まず、一体何が前の社会と異なるのか、といったことを考えるべきである。資本主義以前の社会と本質的に異なつたものがないのなら、なにも資本主義社会などと言つて前の社会と区別する必要などないのだから、あたり前の話である。ところから、私の述べたい事は、そんな事ではないのである。私は法について述べたいと思つてゐる。そのための準備だつたのである。そして、そのための準備だつたのである。

述べていくには、時間が足りないと思ふので、違う方法で述べて行くことにする。右の方法は、Aをやつた後にBをやつた、Bをやつた後にCをやつた、といったやり方である。これに対し、私のこれからのやり方と思つてゐる方法は、Aをやりながら、そのために必要なBを、そしてCをやつていく方法である。

さき程述べた様に、私が問題にするのは資本主義、それも、初期のものとは異なつた、かなり進んだ？と思われる資本主義社会における法なのである。私の明らかにしたい事はつまり、資本主義法といわれる現在日本に通用している法の論理及びその存在の論理である。法というものは、それ自体独立して存在するものではない。それは国家と密接に結びついてのみ存在する。従つて、法を理解するためには、国家についても調べなくてはならない。実は、法というものを理解することよりも、国家を理解することの方が重要だと思ふ。しかし、その事は、とても難かしいことだと思ふ。そこで、日本における法についてまず考えようと思ふ。

まず私たちは毎日行なわれている法の支配の現実を目を向けてみよう。私達が人の物をかつて盗まないとはいふからだろうか、盗む必要がないからだろうか、そうではない。では、人には良心が存するからだろうか。そうでもないと思ふ。一見此の意見は正しい様に見える。しかし、その「良心」という「良」というのは、いったいどういうことか。それは、盗まない事、正しい事、と考える考え方が基調になつてゐるといふ事を示しているにすぎない。つまり、その「良」という字は、まったく公平性(中立性)を欠いた一方的な、偏見で見ているといふ事を示している。しかも、此の意見では、人の心の中に、他人の物を盗んではいけない、という考えがある、といつてゐるのである。そうだろうか。そうではないのである。私達の頭の中に最初から、そんな馬鹿げた(すばらしい?)考えがある訳はないのである。我々は、教育され、つまり、他人の物を盗むと怒られるとか、あるいは刑務所に入られるとか、いろいろな仕方、で、学校や両親等々にイデオロギ―を注入(なにも)学校で教えた事、そのまゝ個人のイデオロギ―になつてゐるのではない。されながら、こゝろ、その考へる様になつたのである。此の事は、もちろん意識され、ない事はほとんどである。なぜなら、その事を我々はきかめて自然に、社会的実践の中で日々反復して教えこまれるから。実社会で生活をするためには、誰でも此の事を守らなければならぬから、私達は、私的



所有権の確立した社会に生きていくからこそ、他人の物を盗む事は悪い事だ、と考えるのである。此の事は、現代の（ブルジョア）法の特質の中でも、最も基本的なものの一つである。

もう一つの基本的な特質は、法が、誰にでも平等に作用する、という事である。これは、平等で非常に良い事だ、などと思つてはいけなものである。なぜなら、現代の社会が、人間をますます、不平等にしていく社会だからである。現在、私たちは、大きく二つの階級に人々が分化しているのを見る事が出来る。そして、現在の社会は、そのままいけば一方の階級に富を集中させ、もう一方に貧困を集中させていくようになっていくのである。従つて、そういつた社会において、その事を考慮せず、に単に全ての者に等しく作用する様な法は、形式的な平等であつて、本当に平等だとは言えないのである。

社会の核

二年B組 星山 幸男

公害は政府・企業が総て悪いとみんなは言う。彼らは自らの利益のために社会を虫蝕んでいるのである。なぜ彼らにはそのようなことが出来るのであろうか。彼らは自らの利益のために、ついには自らも社会の一員だからである。自らが存在する社会を破壊して、その存在は可能であらうか。そのようなことは決してない。つまり、彼らは自らもその社会の一員であることを忘れてしまっている。最も大切なものに気づかないでいるのである。しかし、それは彼らに限ったことではない。彼らを追求する人々総てが、それを自覚して、いるとは言えないだろう。それは人が道をよごすと怒る人が、自分には平気で道ばたにたばこを捨てるなどというのを見てもすぐわからず、最も基本的かつ大切なことではないだろうか。しかし現実では、なかなかそうはいかない。例えば、ある企業の寮では、スポーツ新聞のみ許して、普通の新聞はとらせにくれない。こういう場合は、いかにかに社会の一員としての自覚をもち、社会に目を開こうとして、い

我々高校生にはその場がある。にもかかわらず我々の自覚は十分ではないのである。

放課後我々は汗を流してクラブに興ずる。しかし生徒総会などの生徒会行事の時などには多くは帰ってしまふ。そして生徒会がどうなるかと知ったことではないとさえ公然と言う。生徒会には全く関心を示さず要求のみを出す生徒の多い現状、総務だけが必死になつて動き、他の人は目をそむけている現在の状態を作り出したのは、我々ひとりひとりが生徒会を構成しているのだという自覚が欠けているためではないだろうか。生徒会を動かして行くのは総務でもない。会員総てなのである。

よく自由になりたいと言う。しかし、そう言う人は、果してその努力をしているだろうか。学校の管理下におかれた生徒会に自由はないというが実際に活動してそう感じたのだろうか。先に述べたように、実社会においてはいろいろな障害があるだろう。しかし生徒会においてはそれほどの障害が果してあるだろうか。私は後期生活委員として活動してきたが、そこで最も強く感じたのは、やはり、要求はするけれども自分でそれを求めようとすると人の少ないことである。悪く言えば、自らは欲し、他人をしてそれを得ようという人が多いのである。やはり社会（生徒

会も小さな社会集団）に要求するということは、自分はそれを構成する一員であることを認めていることである。それなのに、なぜそれを自覚できないのだろうか。

会社の労働組合では、組合員総てが団結して彼らの主張をしている。彼らは会社の仕事をきちんとしその上で要求を出しているのである。つまり、彼らは自らの責任を果した上で、社会からそれなりものを得ようとしているのである。生徒会においては追放はない。だからといって委員会をさぼつていいわけではもちろんない。会員であることに責任を持たなくてはならない。この責任を立派に果たした時、我々は自己の主張はもろろんのことと学校側に要求できるのである。ここに自由があるのではないだろうか。

残念ながら、私には生徒会を活動で意義あるものにする具体案はない。しかし、そうなるためには、みんなが生徒会を、この社会を、構成しているという自覚こそが最も大切であると確信している。社会に対して責任を持てば、必ずや私は信ずるから。

ある卒業生の「答辞」

学園建設と

自己変革

三年B組 田名部益興

この「論文新報」がいつ発行されるのか知らないが、今年の卒業式も昨年同様、送辞と答辞のないつまり在校生と卒業生の全体的交流のないまま、サビシク行なわれる。

日常的な校内諸活動（クラブ、委員会など）で部分的な結びつきはあるが、お互いの全般的な生活の全体的な交流は毎年ほとんどない。このことは一人ひとりの高校生としての生活を築き上げる上で、非常にマイナスであるし、残念なことでだと思う。先輩の果たせなかった課題、及びその悪戦苦闘ぶりを後輩に示し、そこから新たな高校生活と学園の建設の土台が形造られてゆくことが、毎年繰り返されれば、着実な発展・生活向上が期待できるのである。この課題は来年度からは是非引継いで行ってもいい。即ち、まず卒業準備委員会を一学期から、しかも三年だけではなく一、二年を含めた全学的なものにし、活動することから始めなくてはならない。委員会の内容も、ただ単に式の形態をどうするか、記念品は何にするか、という狭い問題ではなく、送辞、答辞の全校アンケートに基づく委員・H・Rの討議を経た合同作成

を行ったり、また、三年生の経験とそこから導き出された教訓などを公表してもらい、一、二年生の日常の不満や疑問・意見と交換する会を開くなど、多面的な活動を行うものとする。これが実現すれば、今まで独りで悩んでいた問題などが、意外と早くその解決の糸口を見つけ出すことができたり、それまで全くの赤の他人同志が近づいて友情を育てることを可能にすることもできる。

僕達はお互いに話し合うことによって、それぞれの立場をより客観的に見ることで、考え方・知識も豊かになってゆく。そしてお互いに高校生として、あるいは未来をにやう若者としての自覚を高めてゆくことができるのだ。こういつつみかしくしない討論は、真に僕達を成長させてゆくのであるが、実際には困難な絶え間のない努力がいるだろう。この現実の高校の中では……とにかく来年度からはお互いの話し合いの場、対話の機会を全校的に広げ、幅の広い、層の厚い討論を各人の小さな力を出し合って作っていてもいい。僕達の若い情熱的な活動力、学習意欲は仲間との連帯と固い団結の喜びの輪の中から一人ひとり大きなものになるだろう。一人ひとりが小さな殻に閉じこもらず、勇気を出して、仲間を求めるならば、明るい明日への希望が必ず引き出せるにちがいない。（へみ

んながそれぞれ一人で孤立しているから苦しいんだ。大きな苦しみをみんな一人でかかえこんでいるから辛いんだ。だから、見通しも確信も得られないで、絶望的になったり、動揺したり、投げやりになったり、するんだ。君のまわりをとりまく大きな厚い壁を打ち壊すことだ。そして心をわって友達に話しかけるのだ。初めのうちは相手にしてくれなかったり、だまされたり、裏切られることもあるだろう。が、かりして、みじめな気持ちにもなるだろう。だからといって、もうダメだ、いくら言ってもわかってくれない、と割り切ってはいけなないんだ。相手だって同じ条件に置かれている同じ高校生だ。自分の言うことがまるっきりわからぬ訳がない。真実を訴えかければ必ず通じる。こういって確信を持ち続けることが重要なのです。

そこから少しずつ連帯の輪を広げてゆくことができ、つまり、一人ひとりの壁を壊したあとに僕達の自由な広場ができるのだ。団結が強まると共に、「荒廃」の真の原因は僕達を苦しめるもの、が明確に浮き上がってくる。今後の社会の改革の主体となる僕達が、自分を苦しめるものが社会のしくみに原因があることを知り、それを改革する正しい方針を道すじをつかめた時、怒りと憎しみが平和への情熱と革新の歓びを奮い立た

せ、未来へ向ってのかぎりない勇気と確信を持って前進することができるようだ。

まず仲間づくりから始めよう！

友よ 夜明け前の闇の中で

友よ 戦いの炎を燃やせ

* 夜明けは近い 夜明けは近い

友よ この闇の向こうには

友よ 輝く明日がある

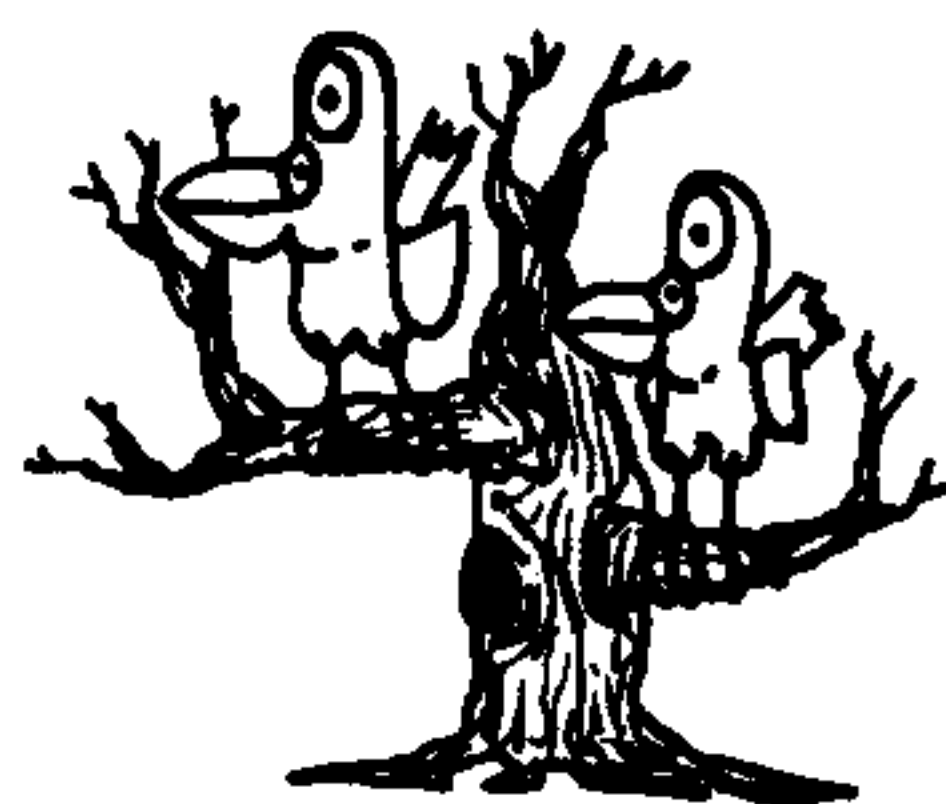
友よ 君の涙 君の汗が
友よ むくわれるその日が来る

* (リフレイン)

友よ 昇り来る朝日の中で
友よ 喜びをわかちあおう

* (リフレイン)

来年度の卒業式にはこの歌を全員でうたえるように。



「人間存在の

原点」

二年B組 花井 達也

。現存在の序

我々は果して存在するのか。私の答えはYesである。なぜなら我々は思惟を続けていると信じているからである。では人間存在とはいったい何なのか。人間とは果して何なのか。思惟とは永続的なものなのだろうか。今君はこれを読んで、そんなとき君の存在は君自身が確認し得る。だが君が知らない人間の中に唯一人投げ入れられてごらん、果して君は君自身の存在をふと疑うかもしれない。ところが、では疑っているという動作をしているのは誰かというよりは、君でしかない。自分はいったとして神のあやつり人形ではないかと考えたとき、それを考えないのはあやつり人形を客観視できず、そのすなわち君自身なのだ。故に私はその「考える」という動作が永続的なものであると信ずる。そのとき私はデカルトの「我思う故に我在り」をある意味では否定する。しかししまったく否定するものでもない。その瞬間的存在を否定するのである。ただ永続的真理である「我思い続ける故に我在り」だけを私は信じつづけるのである。しかし私ははつきり自分を無神論者だと思っっているか、よくわからないのだが、私の考えとしては

「我思う」という永続的動作を止めるには死しかないのであろうと思う。私は死後の世界へもしあるとしたら私はこう呼ばせてもらっている。へんの希望など持っていない。だからこのようないさっぱりありきった答えが出るのだらう。では今私がちょっとつかった言葉：「死」：とは一体何なのだろう。その意味は？その位置は？

。死は生の必然的帰結。生は、その中に死という言葉を内包している言葉であり、「死無くして、生無し。」ということが言える。なぜなら「死」という事実がないかぎり、「生きる」ということという言葉は意味をもたなくなるからである。死は死ななことをいいた。いかなることなのか。キェルケゴールは言った。「絶望こそ死に至る病である」と。彼はキリスト教徒であり神を肯定していた。すなわち、死とは一つの関門に他ならなく、死後の世界までへも希望を持ちつづけることは、それは肉体的死の後でも、立派に生きている証拠であるとして。なるほどそのとき彼は「人間とは精神である」と定義した。この論理でいけば彼は、自己自身の分裂関係を絶望とし死に至る病としたのもおかしくない。しかし私は先にもおきた通り無神論者である。では私にとって死ぬということは何なる

ことなのか。それは私にとっては自己の最期にしか思えないのだ。人間存在の必然的帰結とは思えないのだ。私は人間は精神である。とわきまをきれるような利口ではない。私は人間の中にたくさん矛盾を見つけ、その矛盾が相反しながらも一つの人格と肉体を形成している。その矛盾を知っている。そしてその矛盾というものは、あくまで心の中の相容れないもの、ことではない。そのような孤立したものではなく、つながっているもの。長い紙を一回ねじってつなげ輪をつくったようなもので、最初その表と裏ともが次の裏になる。ような、そのようないつものの中にも、その逆の性格のものが潜んでいる。逆の性格のものが、そのような矛盾の中に人間は居る。そして矛盾を内包している。私には言えない。ところが、その矛盾がこの死という行為によって私からは消え飛んでいってしまうのである。その完全さは死ならではのものと感ずる。どうせ、そのような矛盾は私に感ずるものなのだから私が存在しなくなれば、それは私（無）にとってもはやなんでもない、すなわち無なのである。私にとってはもう何も存在しなくなる。私から肉体をとったものにして、精神をとったものにして、もう私ではないのだ。

。生はそれは無意味か。アルベール・カミュは生の欺瞞性と無意味さを訴えていたが、私は生は本当に無意味であらうか。私は論理によって確認できない。私の真理をもってそれを否定する。生は私にとってその中に死を内包する意味において意味があるのか。ある。私は生きていて何になるのか、何のために生きるとかいう自己欺瞞に落とし入れられるようなことなど言いたくもない。別に理由なくたつていいじゃないか。「理由がない」といって何をしてもいいじゃないか。「何故」とも言う言葉は結局妥協を必要とする言葉なのだ。私にとって生は意味があると思う。そのこと自体、カミュに反論する唯一の。そして絶対不動の証拠なのである。その証拠はそこに何故あるのかは知らない。ただわかっていることは実存することである。

。自殺はそれは崇高に値しない。自殺をする理由はあるだろうか。しかし、それは別にありえない行為である。あるとてつもない不条理性に対する反抗が理由であつたなら、それはもっとあたりまえの行為である。自殺など人間の意志がやらせるものだ。結局、極端な自己主張の末路である。私はこのように死に方は人間のあたりまえの死にかただと思ふ。では何故自殺を惜しむ気持ちが生まれるのか。

それは人間にとって寿命があるからである。もし人間が永遠に生きることができたら死ぬ方法は自殺か他殺か、もう一つ……実は私はこれを崇拜しているのだ。それは何と呼んでいいか自分にはわからないのだが結局、これから説明するようないかな、そんな状態の死に方を考えてもらおう。まずここに彼が居る。彼の前には海がある。彼は何を思ったか、また何もかもわなかつたか知らない。ただ海をじつと見ている。その間にも少しづつ海が彼のそばに近づいてくる。彼はそこにずっと立っている。遠くの方の海を見てただ立っている。水平線は動きもしない。彼は肩まで水につかかってしまった。それを彼は知っている。しかし危機感もない。そして次の日の朝、彼はその場から100m離れた浜に打ちあげられて死んでいる。……このくらしい説明でわかってもらえたとは思わない。ただ。私はそのような死に方がしたい。死ぬつもりでなくして死にたい。

。我死んだ故に我生きてあり私は私自身にとって死によって完全な無になつてしまふ。しかし私が居たという事は私の死を知ってくれた人が皆知っている。私は彼等によつてうけつがれている。それは正確に言うとは私ではない。ただ私に一番近いもの肉体でも精神でもない。人存在

Vただそれだけなのだ。私はすなわち人存在Vなのである。死は私にとつての私Vがすべて、無に帰するところ、私が生を与えられてからの必然的帰結……すなわち人間存在の原点なのだ。

狂 妄

二年A組 合津 文雄

私は自転車を持ち回り回すのが大好きで、近所をよく乗り回している。カメラを持って歩いてみたところ小さな林をみつめた。(筆者は写真部員である) この林が、妙でやたら騒々しいのである。近よって望遠レンズで見ると、林の上方に多数の鳥が飛んでいる。さらに近よると林全体が鳥の鳴声で満たされていることがわかった。場所は、環状八号線で世田谷通りとの交差点より三百M程瀬田よりの所で、この付近は最近開発が進み、しだいに鳥は住みにくくなり、この林に、付近一帯から集めてきたものと思われる。この鳥たちが遠からぬうちに全滅するだろうと思うと、無念感とともに、怒りがわいてきた。今、人々が騒いでいる、公害という話題についてである。人々が怒っている。公害という話題の絶望的發展に対してである。しかしながら又多くの人々は、怒りを感じていない。彼ら少数派はこれに怒っていないが、誰も一緒に怒ってくれない。彼らはなぜ怒らないのか。それは嬉しくてたまらない人が怒らないのと同じである。つまりは、経済や科学の発展には、手段を選ばずべきではないと腹の中で思っているからである。実際、これは余談になるが一日本の首相はそう明言している。こんな考えを述べたりすると多少の非難があるようだが、少し以前なら当り前であつたことは、周知の通りだ。

人間は古代より、より高いものを求めて来たが、その現代における形が経済や科学の発展を優先するということになってきたのである。経済の力は久しい間、人を苦しめているようだが、幸いかな科学の力は自然には及ばなかった。しかし今その破壊力は、三十数億年間決して破れることのなかったサイクル・エコシステムさえも破壊するに及んだ。自然そのものとしての人間が、自然の膨大な年月の単位から見れば、一瞬のうちにそのサイクルを乱した。裏切者は抹殺されるであらう。それを考えるに及んで人間は、果して進歩したのだろうか、と思われてくる。古代より現代あるいは未来の方が、より幸福であり、高度であるか、誰が言えるだろうか。そして、人間の文明感が間違っていると考えるを得ないではないか。

か。人は文明感を変えねばならぬ。唯経済・科学優先をやめると言うことではない。人間を変えて行かねばならぬ。常に人間を大切にする立場から文明を批判して行かねばならぬ。人間は人間を大切にしたい。それは正に人間的になることである。そのように人間(自分)を変えることが、第一歩であり、ある意味では全てである。

編集後記

昨年より企画編集をしてまいりました論文新報が二年ぶりに完成を見るにいたりしました。前回には紛争がおこり発行できなかったわけですが、今回は内容に対しては全く自由、ノ・カットで載せることができました。今回は特にテーマを決めず生徒の考えをいろいろ意見を書かせました。それで予想外に多くの論文が集まりました。委員一同喜びの念に耐えられません。なお、紙面のつごう上載せきれなかったものがあったことをおわびいたします。

